

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01447

研究課題名（和文）近代日本における自由主義的改革の系譜：「貿易立国」から「埋め込まれた自由主義」へ

研究課題名（英文）A History of Liberal Reforms in Modern Japan: From a Trade-Based Nation to Embedded Liberalism

研究代表者

瀧口 剛 (Takiguchi, Tsuyoshi)

大阪大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：10257959

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：近代日本政治史における自由主義的改革の系譜を明らかにした。現代と同様格差問題への対処は、近代日本においても不可欠な要素であったが、資源小国・開放経済を特徴とする近代日本では、一方で戦時を除いて通商と経済的競争力の強化を視野に入れる政策構想が重要であった。近代日本における自由主義的改革路線の系譜として、第一に明治～大正期の「殖産興業」と「貿易立国」から「産業立国」への道を榎本武揚と犬養毅を軸に明らかにした。第二に、昭和初期の「自由通商」から戦後の「埋め込まれた自由主義」の系譜を自由通商運動と大阪財界の動向、さらに政党では芦田均の動向を通じて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、従来軽視されてきた近代日本における自由主義的、非国家主義的改革路線の系譜を明らかにしたことである。戦間期の「格差」や社会問題を視野に入れた「新自由主義」的路线は、どこから来てどこからどこに引き継がれてゆくことになったのか、示唆を得ることになった。また社会的意義としては、現代において注目度の高い、市場と格差問題、さらに外交構想との関係を日本の近代に遡って研究したことである。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the genealogy of liberal reforms in modern Japanese political history. As in the present day, addressing the issue of inequality was an essential element in modern Japan, but in modern Japan, a country with few natural resources and an open economy, policy ideas that focused on strengthening trade and economic competitiveness were important except in wartime.

As a genealogy of the liberal reform path in modern Japan, firstly, the study clarified the "encouragement of industry" and the path from a "trade-based nation" to an "industrial nation" during the Meiji and Taisho periods, focusing on Enomoto Takeaki and Inukai Tsuyoshi. Secondly, the study clarified the genealogy from the "free trade" of the early Showa period to the "embedded liberalism" of the postwar period through the free trade movement and trends in the Osaka business world, and also through the trends of Ashida Hitoshi in political parties.

研究分野：日本政治史

キーワード：貿易立国 殖産興業 産業立国 自由通商 榎本武揚 犬養毅 芦田均 大阪財界

## 1. 研究開始当初の背景

現代のグローバル化に伴う「格差」問題は所謂「ポピュリズム」現象とも結びつき政治の世界で大きな問題を引き起こしている。過去においても社会的不平等をはじめとする格差は、政治の動向を左右する重要な課題であった。「富国強兵」を国策とした近代日本国家においても、これらの社会問題はしばしば躓きの石となった。

近代日本における格差問題への対処法としてまず、社会主義、国家社会主義などが考えられるが、その影響は過大視されるべきではない。また、地方名望家に根ざす積極主義で知られた政友会の路線は、地域間格差を是正する意味を持っていたと解釈できるが、利益誘導政治への批判が絶えなかった。

他方で戦前日本は、経済の対外的開放度の高い資源小国であった。明治後期から人口が過剰で資源・領土が限られた日本という認識が浸透していった。ここから一方で通商とそのための経済力の強化の重要性が認識される。これらは国家主義的介入によっては、十分に強化されないという認識が強かった。戦間期の「自由通商」運動は、その典型である。だが他方で、後発型近代化の過程をたどる 20 世紀の日本では、19 世紀的レッセフェールの正統性は得られなかった。

ここに、一方で通商と経済的競争力の強化を視野に入れ、他方で格差や社会問題をも視野に入れる自由主義的改革路線の重要性が生じるが、従来十分な注目をあびてこなかった。一方では国家主義的路线に注目が当たり、他方で戦間期の民政党内閣に代表されるリベラルは格差問題に関心がなかったという見解も有力である。

だがケインジアン的財政政策をとる福祉国家以前における戦前リベラルも格差問題に取り組んでいた。政党内閣期の民政党内閣が、緊縮財政の一方で労働組合法案を提出していることから分かるように、彼等は社会問題にも関心を抱いていた。研究代表者は、これを戦間期における「新自由主義」の観点から研究を行ってきた。

「新自由主義」路線は急に浮上し、消滅したとは思われない。同時代の国際思潮の影響と同時に、日本の中にその系譜が存在すると考えられる。このような戦間期の「格差」や社会問題を視野に入れた「新自由主義」的路线は、どこから来てどこからどこに引き継がれてゆくことになったのか、このような問題意識が本研究課題の背景である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦間期の「新自由主義」的路线は、どこから来てどこからどこに引き継がれてゆくことになるのかを明らかにするために、近代日本における自由主義的、非国家主義的改革路線の系譜を明らかにすることである。具体的には、第一に明治～大正期の「貿易立国」から「産業立国」への道、第二に、昭和初期の「自由通商」から戦後の「埋め込まれた自由主義」の系譜を解明する。

第一の植民政策を含んだ「貿易立国」の形成から「産業立国」への道では、藩閥と民党の対抗的な勢力の政治指導者による「民活」的要素を含んだ構想の形成に着目する。

A) 藩閥勢力の一員でありながら独自の発想を持っていた榎本武揚の構想に着目する。「北守南進」論的対外構想を持っていた榎本は、植民協会など民間の力を動員して、植民構想、海洋国家構想を実現しようとした。榎本は自由貿易論者・田口卯吉の支援者でもあり、そこには「貿易立国」構想の萌芽がみられる。

B) 民党勢力では、その有力指導者であった犬養毅の「貿易立国」論から「産業立国」への道に着目する。民力休養論を唱えていた犬養は、政治的再編のなかで、貿易立国論から、経済的軍備論、さらに産業立国論という形で、対外問題と関連させて国内政治の刷新、特に普選を唱えるようになる。そこでは人口問題や植民政策、通商政策との関連が見られ、アジア主義の問題とも関わっていた。普選を唱えるようになる犬養の「貿易立国」「産業立国」論の背景には、社会問題があった。

第二に昭和初期の「自由通商」から戦後の「埋め込まれた自由主義」への道では、戦間期の自由通商運動と政友会の芦田均の軌跡から戦後への道を展望する。

C) 昭和初期に誕生した自由通商運動は、自由主義と下からの社会改革をともに唱える「新自由主義」(上田貞次郎)を基盤とし、民政党内閣の井上財政を支持した。プレ福祉国家期の自由主義的改革路線のあり方を示すこのような自由通商運動が戦時期にはどのような姿に変貌するのか、明らかにする。

D) 政友会に属した芦田均の自由主義的改革構想に着目して分析を行う。芦田は対外政策の面では連盟派に近く、同時に自由通商運動の支持者であると同時に戦後はイギリス型福祉国家に共感を持っていた。占領期における中道内閣の首相をつとめた芦田に戦前から戦後にかけての自由主義的改革の系譜を読み取る。

### 3. 研究の方法

本研究は戦間期を中心に新自由主義や自由通商運動に関する研究を行ってきた研究代表者が日本政治史の関連する分野の研究者とともに、十分な研究対象となつてこなかった自由主義的改革路線の政治史に関する共同研究を行おうというプロジェクトである。さらに本研究では自由主義的、非国家主義的改革路線系譜を次の二つのテーマに大別し、(A)～(D)の役割分担のもとに共同研究を遂行した。

第一のテーマが明治・大正期 貿易立国、産業立国構想への道を明らかにすることであり、醍醐と久野が次のように分担した。(A)明治期における藩閥勢力のなかからの構想を榎本武揚を中心に明らかにするもので、醍醐が担当した。(B)明治・大正期政党からの貿易立国、産業立国構想を犬養毅を軸に明らかにするもので、久野が担当した。

第二のテーマが、昭和戦前戦後期における「埋め込まれた自由主義」への道を明らかにするものであり、瀧口と矢嶋が次のように分担した。(C) 民政党と「新自由主義」の系譜を大阪財界・自由通商運動を中心に明らかにするもので、瀧口が担当した。(D)政友会から「埋め込まれた自由主義」の系譜を芦田均に着目して明らかにするもので、矢嶋が担当した。

本研究全体としては、はまず分担者が資料調査と分析を行い、次ぎに研究代表者である瀧口が主催する定例研究会により討議を行う段取りで進めた。さらに必要に応じて補完的な資料調査活動を行い、収集した全資料の読解・分析を完了させた上、研究報告をまとめ、公表した。

### 4. 研究成果

本研究では、自由主義的、非国家主義的改革路線に着目し、近代日本における系譜を次のようにあつづけた。

第一のテーマである明治・大正期の貿易立国、産業立国構想への道を明らかにすることについては、醍醐と久野が次のように研究を行い成果をあげた。

A) 醍醐は、外交面での北守南進論を背景に民間の力を活用して北海道開拓を進めた黒田清隆、榎本武揚らの関連文書、特にロシア、北海道関係資料を収集し検討した。北守南進論として黒田清隆の樺太放棄運動を明治政府の対立構造の中に位置付け、樺太千島交換条約への道を描いた。また樺太千島交換条約が日露間の経済関係にもたらした影響を、ロシア側の先行研究を調査することにより明らかにした。さらに初代駐露公使を務めた榎本武揚の対露貿易構想と北海道の物産との関係を検討した。北海道拓殖では、特に小樽の経済的発展との関連について研究を進めた。まず、経済都市小樽に高等商業学校を誘致する際に果たした榎本の役割や小樽港をめぐる日露貿易の推移を調査した。また小樽の総合的研究を行い、『小樽学』(小樽商科大学出版会)を編纂刊行した。さらに榎本がオランダで製造方法を学んだ石鹼を復刻し、この過程で化学者で行った文理融合的研究の成果を「化学史研究」に投稿し採用された。なお小樽を中心としたアウトリーチ活動を通じて産学連携による地域振興にも貢献した。

B) 久野は、明治・大正期の犬養毅の論説記事を読み込み、また、岡山県内の犬養木堂記念館、岡山県立記録資料館、野崎家塩業歴史館において史料を閲覧・収集した。これらを通して、犬養が、日露戦争以後、憲政本党内の紛争や中国情勢の変化などに対処しながら、支那保全論にもとづく貿易立国構想を形成・更新していく過程を新たな観点で明らかにする報告を行い論文を執筆した。さらに『近代日本政治と犬養毅』(吉川弘文館)を刊行し、犬養の貿易立国構想の展開を地域支持基盤との関わりから体系的に提示した。また「アジア主義」に関する犬養毅の論説記事を読み進め、第一次世界大戦以降における社会問題を背景とした犬養の普選を伴う国家構想(産業立国構想)の更新過程についても検討を進めた。

第二のテーマである昭和初期の「自由通商」から戦後の「埋め込まれた自由主義」への道では、瀧口と矢嶋が戦間期の自由通商運動と政友会の芦田均の軌跡から戦後への道を展望した。

C) 瀧口は、「新自由主義」を基盤とする自由通商運動の軌跡を明らかにするために、機関誌『自由通商』、平生鈞三郎をはじめとする大阪財界の資料を収集し検討を加えた。政党内閣期における民政党の政策には、自由主義的改革路線の性格があらわれているが、大恐慌と満州事変によりこの路線は挫折することになった。さらに、日中戦争以後自由通商運動は大きく変質し、大東亜共栄圏へと変質し、その指導者である平生たちは戦時体制へ深くコミットしてゆく。大阪財界も同様の道をたどるが、戦後には自由主義と貿易立国へ立ち戻った。最終年度に研究成果をまとめた『自由通商運動とその時代 昭和戦前期大阪財界の政治経済史』を脱稿し、翌年度に大阪大学出版会から刊行の予定である。

D) 矢嶋は、自由主義的ありかつ英国の福祉国家への共感を持つ芦田均およびその周辺政治家、外交官に関する資料調査を進めた。芦田が属した属した連盟派の外交官、特に佐藤尚武に関する資料、特にポーランド公使時代(1923-27年)とベルギー大使時代(1931-33年)のもの

に関して、それぞれの国の公文書館を訪問して調査をおこなった。また、ポーランドの公文書館に残されている満洲事変関連の資料調査と分析を行った。占領期に関しては芦田均の側近外交官として活動した鈴木九萬の日記を調査・分析し、第8軍経由の「アイケルバーガー・ルート」が米国との関係を強化しようとする日本側の動きのなかで重要な役割を担っていたことを明らかにした。さらに同じ政友会に属した芦田と鳩山一郎の戦前戦後の軌跡を対比して、両者が自由主義者でありながらなぜ最後には異なった道を歩むことになったのか分析し、公表した。占領期中道路線内閣の首相となった新自由主義的な芦田ではあるが、その普遍主義的国際政治観のために、冷戦期にはそこから軌道を逸れることになった。

以上のように本研究では、近代日本において国家主義とは異なる自由主義的改革路線の系譜を明治期から昭和前期にかけて跡づけた。第一に藩閥側の榎本や民党側の犬養のそれぞれの構想を通じて、明治～大正期の殖産政策と結びついた「貿易立国」から「産業立国」への道筋を明らかにした。両者とも貿易、通商を前提とした地域開発を指向する点では共通していたが、榎本は科学的、テクノクラートの要素をその構想を含み、犬養の産業立国構想はアジア主義的国際政治観と普選をその中を含むようになった。第二に、昭和初期の自由主義と社会改革の契機を包含する「新自由主義」の帰趨を大阪財界と自由通商運動および芦田均の軌跡から明らかにした。大阪財界を基盤とする自由通商運動およびその指導者は、政党内閣期には民政党特に井上準之助蔵相の有力な支持基盤になった。しかし日中戦争後、戦時体制に深くコミットした。他方でこの運動の関係者の多くは、戦後には「貿易立国」的観点から政治経済活動を行った。それに対して、芦田は戦時にも自由主義路線を保持し、占領期には中道政権の首相となる。これは国際経済的な自由主義と国内的な福祉国家を併存させる「埋め込まれた自由主義」状況と適合的であった。しかし冷戦期の芦田のポジションは、その後普遍主義的国際政治観故に次第に中道路線から外れてゆくことになった。

これらのことから、自由主義的改革路線の帰趨には、貿易と通商、さらにその背後にある国際政治経済の動向が重要な影響を与えていることが明らかになった。さらに、それぞれのアクターが基盤とした各地域との関係が重要であることも指摘されなければならない。

これらの点を踏まえて、自由主義的改革路線のその後の行方を探求することが、次の課題への展望となる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名<br>久野洋                                  | 4. 巻<br>第18号            |
| 2. 論文標題<br>明治期の水害対応に関する基礎的考察 明治25年水害を通して       | 5. 発行年<br>2022年         |
| 3. 雑誌名<br>岡山県立記録資料館紀要                          | 6. 最初と最後の頁<br>21-34     |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-               |
| 1. 著者名<br>醍醐龍馬                                 | 4. 巻<br>2021-           |
| 2. 論文標題<br>黒田清隆の樺太放棄運動 - 日露国境問題をめぐる国内対立        | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>年報政治学                                | 6. 最初と最後の頁<br>132 - 154 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>有              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-               |
| 1. 著者名<br>醍醐龍馬                                 | 4. 巻<br>68              |
| 2. 論文標題<br>長崎稲佐ロシア海軍基地をめぐる明治初期日露関係 - 借地交渉とその意義 | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>スラヴ研究                                | 6. 最初と最後の頁<br>45-70     |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>有              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-               |
| 1. 著者名<br>久野洋                                  | 4. 巻<br>287             |
| 2. 論文標題<br>書評 松本洋幸著『近代水道の政治史 明治初期から戦後復興期まで』    | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>ヒストリア                                | 6. 最初と最後の頁<br>64-72     |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-               |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>矢嶋光                              | 4. 巻<br>130-12      |
| 2. 論文標題<br>書評 樋口真魚著『国際連盟と日本外交 集団安全保障の「再発見」 | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>史学雑誌                             | 6. 最初と最後の頁<br>49-58 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし             | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難     | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>瀧口剛                                   | 4. 巻<br>70-3・4        |
| 2. 論文標題<br>民政党内各期における産業合理化・製鉄合同と大阪財界 自由通商運動を中心に | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>阪大法学                                  | 6. 最初と最後の頁<br>465-495 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難          | 国際共著<br>-             |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>久野洋                                   | 4. 巻<br>12          |
| 2. 論文標題<br>書評 中元崇智著『明治期の立憲政治と政党 自由党系の国家構想と党史編纂』 | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>年報近現代史研究                              | 6. 最初と最後の頁<br>41-46 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                  | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難          | 国際共著<br>-           |

|  |                      |
|--|----------------------|
| 1. 著者名<br>矢嶋光                                  | 4. 巻<br>70 - 2       |
| 2. 論文標題<br>鈴木九萬日記 ( 1 ) 1948年1月1日 ~ 1950年4月30日 | 5. 発行年<br>2020年      |
| 3. 雑誌名<br>名城法学                                 | 6. 最初と最後の頁<br>21-214 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                 | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-            |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>矢嶋光                             | 4. 巻<br>70 - 3        |
| 2. 論文標題<br>鈴木九萬日記(2) 1948年1月1日～1950年4月30日 | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>名城法学                            | 6. 最初と最後の頁<br>109-234 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし            | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難    | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>矢嶋光                          | 4. 巻<br>283         |
| 2. 論文標題<br>書評 森靖夫著『「国家総動員」の時代 比較の視座から』 | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>ヒストリア                        | 6. 最初と最後の頁<br>70-77 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>醍醐龍馬                      |
| 2. 発表標題<br>榎本武揚の化学者の特性ー石鹼製造への関心を中心にー |
| 3. 学会等名<br>洋学史学会若手部会6月例会             |
| 4. 発表年<br>2022年                      |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>醍醐龍馬  |
| 2. 発表標題<br>化学者榎本武揚と石鹼                                      |
| 3. 学会等名<br>小樽商科大学 グローカルプロジェクトシンポジウム「地域密着型大学における文理融合研究の最先端」 |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|                             |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名<br>久野洋              |
| 2. 発表標題<br>近代日本の政治家 明治期の犬養毅 |
| 3. 学会等名<br>吉備創生カレッジ         |
| 4. 発表年<br>2022年             |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Akira Yajima  |
| 2. 発表標題<br>Ideal and Reality of Article 9 of the Japanese Constitution |
| 3. 学会等名<br>Chair of Japanese Studies, University of Warsaw             |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>醍醐龍馬                                      |
| 2. 発表標題<br>長崎稲佐ロシア海軍基地をめぐる明治初期日露関係 - 国境交渉と並行した借地交渉 - |
| 3. 学会等名<br>東アジア近代史学会第205回例会（招待講演）                    |
| 4. 発表年<br>2021年                                      |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>醍醐龍馬                           |
| 2. 発表標題<br>小樽ボーダーツーリズムの可能性 - 日露交流の史跡を繋ぐ - |
| 3. 学会等名<br>第6回小樽市・小樽商科大学共同研究会             |
| 4. 発表年<br>2021年                           |



|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>醍醐龍馬                     |
| 2. 発表標題<br>開陽亭と樺太境界画定委員会議           |
| 3. 学会等名<br>小樽商科大学旧魁陽亭共同研究成果報告シンポジウム |
| 4. 発表年<br>2021年                     |

|                                  |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>瀧口剛                   |
| 2. 発表標題<br>大阪財界と戦時体制・「大東亜戦争」への道  |
| 3. 学会等名<br>第95回 グローバル・ヒストリー・セミナー |
| 4. 発表年<br>2020年                  |

|                         |
|-------------------------|
| 1. 発表者名<br>久野洋          |
| 2. 発表標題<br>明治政治史と犬養毅    |
| 3. 学会等名<br>岡山地方史研究会9月例会 |
| 4. 発表年<br>2020年         |

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>矢嶋光                     |
| 2. 発表標題<br>芦田均と戦後外交の形成 連盟外交から日米同盟へ |
| 3. 学会等名<br>占領・戦後史研究会               |
| 4. 発表年<br>2020年                    |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>醍醐龍馬                                |
| 2. 発表標題<br>長崎稲佐ロシア海軍基地をめぐる明治初期日露関係 - 借地交渉とその意義 |
| 3. 学会等名<br>日露関係史研究会第22回例会                      |
| 4. 発表年<br>2020年                                |

〔図書〕 計5件

|                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>醍醐龍馬      | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>小樽商科大学出版会 | 5. 総ページ数<br>416 |
| 3. 書名<br>小樽学        |                 |

|                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>久野 洋      | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>吉川弘文館     | 5. 総ページ数<br>334 |
| 3. 書名<br>近代日本政治と犬養毅 |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>岩城 卓二、上島 享、河西 秀哉、塩出 浩之、谷川 穰、告井 幸男 | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>ミネルヴァ書房                           | 5. 総ページ数<br>388 |
| 3. 書名<br>論点・日本史学                            |                 |

|                         |                 |
|-------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>久野洋（飯塚一幸編、共著） | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>吉川弘文館         | 5. 総ページ数<br>284 |
| 3. 書名<br>近代移行期の酒造業と地域社会 |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>小樽商科大学グローバル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部編、醍醐龍馬 | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>小樽商科大学グローバル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部       | 5. 総ページ数<br>73  |
| 3. 書名<br>旧魁陽亭 - 北海道を代表する老舗料亭 -                   |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                     | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                   | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 久野 洋<br><br>(Hisano Yo)<br><br>(10795181)     | ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授<br><br><br>(35305) |    |
| 研究分担者 | 矢嶋 光<br><br>(Yajina Akira)<br><br>(30738571)  | 名城大学・法学部・准教授<br><br><br>(33919)         |    |
| 研究分担者 | 醍醐 龍馬<br><br>(Daigo Ryouma)<br><br>(70802841) | 小樽商科大学・商学部・准教授<br><br><br>(10104)       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|